

# 語学教育を支える価値観

金田千秋

芸術学系教授

芸術専門学群長から、「大学の語学教育」というテーマで寄稿してほしいという依頼が自分のところに来ているが、先生どうですかと誘われて、「いいですよ」と気軽に引き受けたのが大間違いであった。このテーマはどうやら端倪すべからざる難題であるらしく、現在のところ思案投げ首の状態である。

しかしそうも言っていられないので、思いつくままに文章を綴って見ることにしよう。

## むかしむかし

「大学の語学教育」ということで私が最初に思い出すのは、ギリシア語とラテン語に関係する話題である。私は京都大学の文学部というところを卒業して、そのまま同大学院に進学したのだが、その直前まで（昭和で言えば40年代前半まで、西暦で言えば1960年代の後半まで）、文学部の哲学ではギリシア語とラテン語

の少なくとも一方が必修科目ではなかったか、と記憶する。そしてこれはいま思い出しても凄と思うのだが、当時、大学院の入学試験ではギリシア語とラテン語の少なくとも一方を受験することが哲学の全受験者に課せられていたという事実である。それはいまから思えば信じられないような話であって、私の記憶に間違いさえなければ、たとえば大学院に進んでウィットゲンシュタインの研究しようという者にも、ギリシア語かラテン語の基礎学力を要求するという（無茶苦茶な？）話である。

しかし、昭和43年頃のことであったか、例の学園紛争が起こって、学生側がカリキュラムの改編を要求し、その結果ギリシア語・ラテン語を必修科目から外し、大学院の受験科目からも除外するという措置が取られたらしい。（らしいというのは、そのとき私は別の学部にいたので詳細を詳らかにしないのである。し

かしおかげで私はギリシア語・ラテン語を受験せず大学院に合格できて、胸を撫で下ろしたのであった。)

さてこの話はさまざまな事柄を物語っている。その第一は、文学部当局がヨーロッパ古典語の教養を哲学の全学生・院生に対して要求していたということである。(これはおそらくオックスフォード大学かケンブリッジ大学などの制度を真似たものであろう。) 第二に注目すべきは、それまで学生・院生の側からはこれに対する不満が公然とは出されていなかったということ。内心に不平はあったとしても、それでも大部分の学生がそれを是としていたということは、いま振り返れば或る感慨を禁じ得ない。第三に、文学部側と学生側の間に、上記の点に関して或る「合意」が存在していたということである。周知のようにラテン語はたいへん難しいし(あの文法は一週間もやらないとすぐに忘れる)、ギリシア語も別の意味でこれまた難しい。専攻する対象が古典語と無関係な者にとってはことのほか、そうである。それでも、敢えてやってみたまえという期待が文学部側に、そしてやってみましようという気概が学生側に、それぞれあったのだろうし、またその知識は決して無駄ではないという点についての合意もそこにはあっ

たのだろう。これは教官と学生の間に、古典または「教養」についての「合意」があった時代の話である。そして当時、少なくとも京都大学の文学部では、語学教育全体が基本的に古典語の教育をモデルとして形作られていたと思う。(もっとも、この大学の文学部は良くも悪くも「変」なので、上記の話を当時の大学の一般的傾向と見ることは適当を欠くだろう。) これは、古典が規範であり、「教養」が人間の理想形であり、そしてまさにそのことが大学内の「合意」の内容をなしていた、そんな時代の話である。(なお誤解なきよう注意しておくが、私は昔は良かったと言っているのではない。上記のような教養観と語学観は種々の問題を抱えているし、そもそも当時の学問的水準についても問題なしとはしないのである。)

### いま現在

さて我々の時代に眼を転じたとき、今の話からどんな教訓が導けるのだろうか。まず次のような課題を思いつく人がいるかも知れない。語学教育の根底にあったのはむかしは「教養」という価値観であり、当時は学生に教養を授けることが語学教育に関する「合意」の内容だった。だから、いまは教養に変わって

何が基本的価値であり、いま何について教師と学生は（語学教育に関して）台意をなすべきか。それが問題なのだ。

しかしこれは意識の罨ではあるまいか。いちばんまずいのは、上のように問いを発したとたん答えが自動的に出てしまうことである。いわく、「今のグローバル化しつつある世界で生きていくためには、英語の能力が必要であり、その内容は古典ではなく、IT革命に対応するようなものでなくてはいけない。同時に英語の第二公用語化も図らなくては」みたいな話。

この手の話に対して私はちょっと眉唾である。それにはいろいろな理由があるけれども、（会話ベタの私の希望も込めて言えば）優秀な自動翻訳機がいずれ登場する可能性が非常に高いからである。ちょっと前まで翻訳ソフトは「まあそういうものもあるけれども、もう一つですね」みたいな評が一般的だった筈だが、近ごろは性能も改善されつつあると聞く。そしてこの種の機械の性能は改善される一方なのである。ところがこんな機械ができてしまえば、グローバル化だの、IT革命だの、第二公用語だのというレベルで語学教育を語ること自体が、その前提を失いかねないではないか。いずれコンピューターが家電化し、インターネットとは蛇口をひねれば情報が流れ出す水道管の異名と化すことが必定だとす

れば、いま時のスキャナーみたいな機械に英語の原稿をセットしてスイッチを押すだけで、横のスピーカーが日本語で朗読してくれる、というのはもはや絵空事でもなんでもないのである。そうだとすれば、語学教育（外国語教育？）を、グローバル化だの、IT革命だのという次元で云々することには、見かけほどしっかりした基盤がある訳でもない、ということにはならないか。

グローバル化／IT革命という文脈で語学教育を考えるのもいいだろう。しかし一本足で立つのは危険である。私が言っているのは、「教養」についてのもう一つの問題設定である。いま否定的に扱った見解は、「むかしはく教養>が語学教育を支える価値であったが、ではいま何がそれに変わる価値なのだろうか」と問うている。しかしこう問うことだってできるのではないか。「むかしはく古典の教養>が語学教育を支える価値であったが、ではいまく何の教養>がそれに変わる価値なのだろうか」と。この時考え直すべきは「教養」という言葉の内包なのである。

新しい教養概念が構築されなければならない。教養なきがゆえに自他を傷つけて止まない者たちを見るにつけても、強くそう思う。

（かねだちあき 美学）